



第17回「金融と経済を考える」高校生小論文コンクール

未来を造る「声」

岩手県・岩手県立一関第一高等学校 1年 後藤 侑紗

「水沢の駅前には華がないなあ」と毎日一関から水沢まで電車で戻ってくると率直にそう感じる。私は中学の頃から水沢と一関の間を毎日通学しているが、正直言うと水沢の駅周辺はまるで活気がないと感じる。「一関に引っ越したいね」と母とよく話しているが、通学に便利だからという理由以上に、一関の町としての魅力が大きな要因となっていると思う。駅と学校、図書館、文化センター、菜の花プラザの位置関係は本当によく考えられていて、学生に必要な書店、文具店、飲食店、塾等が周辺にほどよく点在している。その上1階が広い無料駐車場になっている図書館には、Wi-Fiや飲食スペース、学習室が充実しており、部活帰りや電車待ちの学生が、食事をとって長時間学習に集中することができる。試験前等は学習スペースが足りなくなるので、駅の近くに菜の花プラザというもう一つの施設が用意されている。菜の花プラザもまたWi-Fiや飲食スペースが用意されている上、3フロア利用できるので、先輩後輩に気兼ねすることなく学習に集中することができる。一関は本当に学生のことがよく考えられている町だと感じる。

町の発展には、次世代を担う若者の育成は非常に重要な課題だ。故郷に誇りと愛着を抱く学生達の多くは、きっと将来生まれ育った町に貢献しようと努めることだろう。そして貢献できる人材になるべく、学業や様々なことに懸命に打ち込む学生時代を過ごすことだろう。選挙権を有する高齢者の福祉に力を入れることも大切だが、将来選挙権を持つようになり、町の未来を担う私達学生が充実して学習にのぞめる環境にも心を配って欲しいと心から願う。

私は学生の目線でしか物事を捉えることができないが、大人の目線ではどうなのかを身近な大人に聞いてみると、教育、医療、福祉の各面で一関はよく考えられていると話していた。水沢と一関、二つの町の違いはいったい何なのか市役所や商工会議所に問い合わせたり、親子で話し合った結論は、有識者の意

見優先で物事を進めているか、それとも、学生、高齢者、主婦等々の現場の声を拾って現場に活かしているかの差が非常に大きいのではないかというものだった。冷静に思い返してみると、私は16年間自分の町で、町に何が必要か、何を望むかというアンケートや投書のような物に触れたことが一度もないので、是非定期的に行ってもらいたいと思う。

物事の決定の方式の違いもかなり大きいようだ。過半数で決めて遂行することができるか、それとも満場一致でなければ物事を進められないのかも、新風を取り込めるか否かに大きく関わるようだ。例えば水沢の隣の金ヶ崎が特区申請をして他の地域より早く幼稚園や小学校に英語を導入できたのは、小学校数が少ない^{ため}に町の全小学校長のコンセンサスがわりと容易に得られたからだった。市町村合併で大きくなり、金ヶ崎の何倍もの小学校数がある奥州市では、全小学校長のコンセンサスを得るのはかなり難しいだろう。満場一致方式では、1名でも変化に尻込みする保守派がいれば、決して町に新風を取り込むことはできない。高齢になったシャッター商店街店主には、十分な貯蓄があり、特段新しい試みに踏み出す必要がない人もいるかもしれない。全員の同意を得なければならない地元商店街では、いかなる理由であれ、1名でも新案に反対する者がいれば、新しい試みに乗り出すことはかなり困難だろう。決定方式の選択は、地域の経済発展に大きく影響する要因であることを私は強く感じた。

次に医療、教育、福祉等をはじめとした各現場の声がスムーズに行政に届くかの問題がある。政治に熱心だったり、政治に何らかの繋がりのある者だけでなく、私達学生も含めた誰の声も気軽に届く仕組みが欲しい。有力者や年長者だけで町を動かすのではなく、たとえ何度か失敗しても、若者に新しい試みに挑戦させて欲しい。一度失敗した試みも、若者の体力気力と熱い思いがあれば、トライ&エラーを繰り返す中でより素晴らしい物になっていく可能性は充分にあるはずだ。新たな挑戦を決して止めず、失敗を「そら見たことか」とせず、温かく見守ることこそが、町全体の進歩や発展に繋がるのではないだろうか考える。

町を活性化させるには、逆境を悲観せずにチャンスに変える発想力と行動力も大切だ。母が留学していたカリフォルニアに「ジュリアン」という有名な「りんごの観光地」があり、ジャムやアップルパイをはじめとした様々なりんご特

産物があったという。町全体が古き良き時代のアメリカの田舎町を演出していて、絶えず観光客で賑わっていたそうだ。江刺や青森は自然災害があると収穫に大きな打撃を受けるが、その町は災害が起こるとテレビやラジオ、各メディアが取り上げ、「アフターストームフェスティバル」に多くの観光客がつめかけて、日本で言うところのイチゴ狩りや葡萄狩りのように入場料を支払ってりんごを拾って行ったり、ボランティアがパイやジュースを作ったりするという仕組みが定着していたという。母が留学していた30年も前に可能だったのなら、SNSが発達した現代では更に効率的に行う事が可能ではないだろうか。多くの手間をかけて丹精した高品質な果実に誇りを持っているりんご農家にとっては屈辱的なことかもしれないが、落ちたりんごを廃棄したりジュース等の加工品にするよりは、多くの人々に利益のある事ではないかと想像できる。県内外からの観光客も訪れるだろうから、地域の他の店や会社にも良い影響があるだろう。一度訪れて好印象を持った人達は再び嵐が来ることに目を光らせるリピーターになったり、楽しかったイベントの情報を拡散してくれるので、その後も町にとって良い循環が生まれるだろう。自分達の町を自然災害に肩を落として涙するままにするより、逆境に立ち向かって打破するたくましさのある町に行きたいものだ。

私はアメリカのりんごの里の話や、近隣の町の様子を周りの大人たちから聞くばかりだが、学生のうちに是非、国内外の町の様子をこの目で見聞きして来たいと思っている。中学の時に奥州市の海外派遣団に申し込もうとしたが市外の中学に通う私には申し込む権利がなく、一関海外派遣団に申し込もうにも一関市民でなかった為に不可能で、どちらにも応募さえ許されずに大泣きしたものだ。見聞を夢見て語学を学んだり町の仕組みを調べたりしていたので、どうしても諦めきれなかった私はインターネットで捜して様々な海外派遣団に応募し、最終的に「TOMODACHI・MUF G国際交流プログラム」^{注)}で2週間のアメリカ派遣を体験することができた。まだ14歳で親から離れた経験の無かった私は、渡米直前の空港で通信機器を盗まれて大切なデータを失い家族と連絡を断たれるという辛い経験もしたが、海外の町を見聞するという経験は確実に私を成長させてくれたと思う。これから是非もっと違う町をこの目で見たいと思っている。予算の関係もあるのか、若者の海外派遣の門はどんどん

狭くなってきているが、人材育成のためにどうかこれ以上狭めないで欲しいと思う。

地域住民の生の声を拾い、未来を作る学生達を大切に、物事をスムーズに運べる仕組みを作り、逆境を逆手に取る勇気と行動力を持つ若者に失敗を恐れずに行動させる温かい見守りがあれば、町は次第に明るくなっていくのではないだろうか。

鮭が生まれ育った川に戻るように、私達が生まれ育った町にまた戻りたいと思えるように、町はどうか私達学生の声にもっと耳を傾けて欲しいと思う。一つひとつは小さなちいさな声だけど、企画が持ち上がって一歩踏み出して転がり出しさえすれば、私達の声はいつのまにか田園地帯に響く夏の夜の蛙の声のように大きく響き渡るかもしれない。

(注)

日本の非営利教育交流団体である日本国際生活体験協会（EIL）が運営する、東日本大震災で被災した日本の学生とカリフォルニア州南部の高校生を対象とする交流プログラム。

